忙中一筆

人口の減少と急速に進む少子化・高齢化

藤川雅司

長女が二四歳になり、次女も二〇歳になり、いつ結婚するのかな、孫はいつ出来るのかなとそろそろ期待できるようになってきた。しかし、こればかりは私の思うようにはならない。最近は結婚しない女性が多いようだし、また晩婚化も進んでいる。本人はどう考えているのか、聞いてみようと思っていた。

そう思っていたところに、昨年一二月、国立社会保障・人口問題研究所が日本の人口推計を発表した。

今回の人口推計のうち札幌市に着目してみると、札幌市の人口は、二〇一五年で一九一万四二六五人とピークに達して以降は減少に転じ（五年毎の推計値による）、二〇三〇年には一八一万九五二六人となるとのことである。人口の減少それ自体の問題はいろいろな見方があると思うのでここでは触れないが、人口の構成が大きな問題である。

今年は二〇〇九年であるが、五年毎の推計値で見ると、二〇一〇年を基準に、年少人口（一五歳未満）比率が一一・三％から、一〇年後は九・三％、二〇年後は八・二％となる。一方、七五歳以上の割合は、九・七％から、一〇年後は一三・八％と年少人口を上回り、二〇年後には一九・五％と、年少人口の二倍以上になるのである。老年人口（六五歳以上）も、二〇・四％から、一〇年後には二八％、二〇年後には三二％となる。現在五人に一人が六五歳以上だが、二〇年後には三人に一人が六五歳以上となるのである。一〇年、二〇年はあっという間に過ぎていく。急速に少子・高齢社会になるのである。日本全体も同様である。

これは、一方では子どもの数を増やす施策（子育て支援）を充実させ、また一方で高齢者支援施策の早急かつ大幅な充実が必要であることを意味する。

子育て支援については、子育てへの経済的支援、子育て相談、保育所待機児童の解消、学童保育の拡充、男女がともに子育てできる環境づくり（ワーク・ライフ・バランス）など課題は見えているが、今のペースで間に合うのか。

子どもは減っているが、保育所への入所希望者は増えている。例えば札幌

市では、二〇〇四年四月時点で就学前児童は九万二六〇人だったが、五年後の二〇〇九年四月時点では八万六二五二人と約四〇〇〇人減っている。一方で保育所の入所児童は一万五六六九人から一万八一八二人と二五〇〇人以上も増えているのに、待機児童数は〇九年四月現在四〇二人なのである。入所者を増やしても更に需要は増えているのである。

一方、高齢者支援についても、介護予防、介護サービスの拡充、単身高齢者への支援（孤立死の予防）、医療制度のあり方など、課題は見えているのだが、こちらも急速に進む高齢化に対応できるのか懸念される。すでに、団塊の世代が六五歳になる、いわゆる「二〇一五年問題」をどうするか、などと言っている場合ではないのではないか。

介護をする人も高齢者という老老介護の問題も大きい。わが家でも、一〇年以上前に父が倒れ、母が看護や介護をしていた。当時七〇歳前後の父と母であったが、その労力は大変なものであった。

併せて、高齢化の問題を考えるにあたっては、倫理観・人生観にまで発展する議論も必要になってくるのではないか。例えば、臓器移植をめぐって、人の死についての議論がなされているが、これは高齢者の課題（「老い」をどう考えるか）でもあるのではないだろうか。また、社会保障の仕組みとあわせて、子育て支援や高齢者支援を地域が担えるよう、「地域力」を高めることも非常に重要となってくる。

聞けば、公園の子どもの声がうるさい、運動会の音、運動会の練習の音がうるさいとの苦情が多く、対応に苦慮している地域が増えているとのことである。子どもはうるさいくらいがちょうどいい、と私個人としては思うのだが、二〇年もすれば、静かな公園、静かな運動会に自然となっていくだろう。果たしてそれでいいのか。

将来を見据えた社会のあり様について、「本気」で議論する時期に来ているのではないかと思う。自省も含めて、昨今はあまり「本気」で議論したり「本気」で物事に取り組むことがあまりに少ない気がしてならない。二〇年後には、四四歳、四〇歳となる子どもたち（同じく三六歳となる長男も）と、「本気」で話し合ってみなくてはならない。この「本気」こそが今は大事だと思う。

〈ふじかわ　まさし・札幌市議会議員〉